

出雲大社「平成の大遷宮」で約120年ぶりに復活した「ちゃん塗り」の技術

鳥根県の出雲大社では今、大遷宮が進められている。国宝に指定されている本殿などに、60年ぶりの修理が施されているのだ。この大遷宮で約120年ぶりに復活した技法がある。ロジン(松やに)を使う「ちゃん塗り」だ。文化財修理の専門家たちは、古文書を頼りにこの伝統技法の復活に取り組んだ。成分の分析から始まったその取り組みは、文字通り試行錯誤の連続だった。このままでは廃れていったかもしれない幻の技法が、こうして蘇ることになった。

不慮の火事で資料を焼失

毎年1回、八百万の神々が集まる場所として知られる出雲大社では、およそ60年に1回、大遷宮を行うことになっている。遷宮といっても、神社そのものを別の場所に移すわけではない。本殿などを本格的に修理するため、本殿に祀られている神を一時的に仮本殿に移すことから、大遷宮と呼ばれるのだ。国宝である現在の本殿が造営されたのは1744年(延享元年)。以来、これまでに3度の遷宮が行われており、前回の遷宮が行われたのは1953年のこと。2013年はそれからちょうど60年目にあたる。「修理を終えた後、神様にご本殿にお戻りいただく本殿遷座祭を2013年に行うと決め、それに向けての準備に着手したのは2000年頃からでした。まずは、60年前に、どのように遷宮を行ったかを知るための資料収集から始めました」
出雲大社で禰宜(ねぎ)を務める

平岡邦彦さんがそう語る。大遷宮は60年に1回しか行われなから、長年神社に奉職していても遷宮に立ち会えるとは限らない。現在、出雲大社には53人ほどの神職が務めているが、前回の大遷宮を実際に見た人はほとんどいない。しかも不運なことに出雲大社では、前回の大遷宮が行われた直後の1953年5月に出火し、拝殿、鑽火殿(さんかでん)、庁舎などを焼失して、遷宮に関する資料の多くを失っていたのだ。

平岡さんたちは、独立行政法人国立文化財機構の奈良文化財研究所などと文化財としての建造物調査を進めながら、修理の段取りなどを検討していった。だが、平岡さんは「いろいろ調べましたが、60年前のことについてはまだ分かっていないことの方が多いのではないのでしょうか。だから前回と比べて、何が違うのかも知りようがありません。ただ、分かったことはきちんと継承していこうというのが基本方針でした」

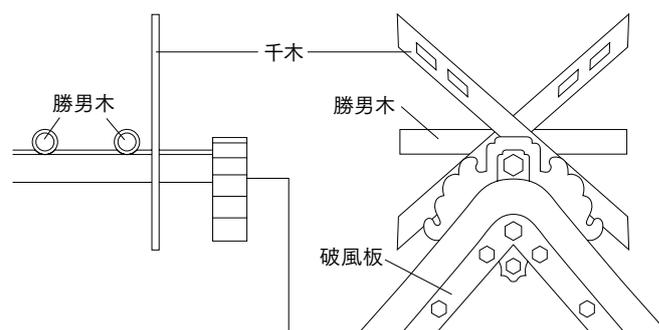
古文書に記されていたちゃん塗りの伝統

もちろん修理そのものは、専門の技術者によって行われる。今回、出雲大社の大遷宮の修理を担ったのは、国指定の重要文化財の修理を行う技術団体である公益財団法人文化財建造物保存技術協会(文建協)の技術者たちだ。文建協の技術者たちは工事が始まる3年ほど前にまず建物の状況を知るための調査を行った。

「建物がどの程度傷んでいるかを調べるのですが、解体してみないと分からないこともあります。しかし修理の前に解体することはできません。したがって見えない部分は外部の状態から推測して、修理計画の立案を行うこととなります。出雲大社の場合、大屋根の檜皮葺(ひわだぶき)には下部で長さ4尺、上に行くほど短くなり最上部で2.5尺の檜皮を使っているという記録が残されていますが、実際に解体してみたら上部



2011年11月から進められた本殿大屋根の「ちゃん塗り」の作業は、2012年2月に終了。本塗りの前には、何度も塗装材の試験を行い、改良を重ねた。前回の遷宮に携わった職人から伝え聞いた「ちゃん塗り」の製造方法に忠実に従ったことが、今回の「ちゃん塗り」成功へと導いた。



本殿大屋根 正面

本殿大屋根 側面



で使われている檜皮は3尺のものでした。2.5尺は使われていなかったの、そこは途中で設計を変更しました」

今回の修理に際し、設計監理事務所長を務めた文建協副参事の岡信治さんが言う。

そうした調査をしているとき、岡さんは出雲大社が保管していた「延享造営傳(えんきょうぞうえいでん)」という古文書をもう一度改めて読み返してみた。現在の本殿が造営されたときのことを記した資料だが、あるページを見たとき岡さんの目が留まった。大屋根の棟飾りを覆う銅板などの外側に「ちゃん塗り」を施し

たという意味の記述があったからだ。

ちゃん塗りは日本の伝統的な塗装技法のひとつで、松やにを主成分に、えの油(エゴマの油)、鉛、石灰などを配合した「ちゃん」を使うのが特徴だ。伸縮性に優れ、薄い銅板を保護するのに適しているとも言われ、もともとは西洋から伝わったものだとする説もある。しかし、近代以降になると化学塗料のペンキなどに押され、ちゃん塗りの技法は減多に使われなくなっていく。

ただ、岡さんの目が留まったのは、ちゃん塗りという珍しい技法が使われていたことが分かったからではな

かった。むしろその逆で、その記述に該当する部分の銅板を見ても、しっかりした塗膜が見当たらなかったから、疑問に思ったのだった。

赤外線分析で 松やに成分を検出

実は前回の大遷宮の時には、この銅板には、手がつけられていないとみられていた。つまり、現存する銅板は、明治の遷宮の時に取り換えられたものなのではないか。とすると、すでに約120年が経過しており、もしその時塗装を施していたとしても、

塗りがすっかり剥げ落ちてしまった可能性がある。

「目で見た限りでは塗装してあるようには見えなかったので、当初の設計は塗装を施さない前提で進めていました。しかし実際の銅板を何度も繰り返し見ているうちに、銅板と銅板が重なっていた部分には、何らかの塗装を施したような形跡がかすかにあることに気がつきました。そこで表面を赤外線分析すると、松やにの成分が検出されたのです」(岡さん)

そこで岡さんたちはさらに詳細な分析をしたうえで、ちゃん塗りを自分たちで再現してみることにした。松やになどの材料を調達し、分析結果をもとに配合して、実際に塗ってみたのである。

ちょうどその頃、岡さんたちは、神社側から「延享造営傳」とは別の新たな文書を開示された。前回の遷宮に立ち会ったひとりの神職が、職人から聞いた話を書き残したメモだった。それを見て岡さんは胸が高鳴るのを抑えられなかった。なんとそのメモには、「古例」として、ちゃん塗りに関する記述があり、使用する材料の配合まで詳細に記されていたのである。

「その配合は、私たちが試作してうまく塗れたものとほぼ一致していました。過去にちゃん塗りが施されていたことが確信できたので、私たちはそのことを神社側に伝えました」

だが、岡さんたちの報告に対し、神社側はすぐには納得しなかった。「岡さんたちが作成した色塗りの完成予想図を見て、違和感を感じたからです。私たちは何十年もの間、薄い緑色の緑青が浮き出た銅板を見ていたのですが、岡さんたちが私たちに見せてくれたのはそれとは程遠い黒色をしていました。前回の大遷宮では、銅板を換えなかったため、ちゃん塗りをしていない。しかしその前の明治の大遷宮のときには、ちゃん塗りをしている。そうであるならば、本来の状態に戻すべきだとい

う理屈は理解できたのですが、こちらにお参りに来られたお客様たちが、すっかり色が変わってしまったものをご覧になってどう思うか。私たちはそれを危惧して、悩んだのです」(平岡さん)

それに対して岡さんたちは、こう主張した。

「他の塗装技術に比べ、ちゃん塗りが銅の保護に特に優れているとは言えません。しかし、理にかなった方法ではあります。塗りが何十年ももつものではありませんが、年月とともに緑青とマッチするようになっていき、いずれは緑青に置き換わっていくでしょう」

もちろん最終的な決定は、神社側が下す。そして平岡さんたちは結局、ちゃん塗りを施す道を選んだ。今回使わなければ、ちゃん塗りと伝説的な技法がここで廃れてしまうかもしれない——。そんな危機感にも似た思いが、神社側を決断に導いたのである。

神は細部に宿る

こうして約120年ぶりにちゃん塗りの技法が復活することになった。だが、塗装職人の中にも、ちゃん塗りの施工体験がある者は数少なかった。いったいどんな道具を使って塗ればいいのか、塗膜はどれくらいの厚さにすればいいのか、分からないことはまだ限りなくあった。そこで岡さんたちはちょうど出雲大社の現場に入っていた漆職人に施工を依頼することにした。塗装材の試作、施工の試験はそれから何度も何度も行われた。本殿の塗装の前には、念入りの最終確認も行った。その結果、塗面が乾くまでには約3週間を要することなども分かってきた。そうして知見とノウハウを積み重ねていった上で本殿の塗装に取り掛かったのは、2011年の夏に入ってからだった。「同じちゃん塗りとっても、大屋根の千木(ちぎ)や勝男木(かつお

ぎ)などの棟飾りには油煙(炭)を混ぜた『黒ちゃん』が、破風板(はふいた)の鋳金具(かざりかなぐ)には緑青を混ぜた『緑ちゃん』が塗られていました。もちろん、今回もそれに従ったのですが、『黒ちゃん』はうまくいきましたが、『緑ちゃん』は、うまく塗れる方法にたどり着くまでずいぶん試行錯誤しました」と、岡さんは振り返る。

一方、平岡さんの方は、仕上がりを見てすっかり満足した様子だ。

「撰社の塗りを見て、安心しました。落ち着きたいいい仕上がりになっています。専門家の人たちが、いい仕事をしてくれました。ご本殿の大屋根の部分は、下から見上げただけでは私たちでもほとんど何も分かりません。まして参拝に来られたお客様は、もともとちゃん塗りのことなどご存じない方が多いでしょうし、色が変わったことにも気づかれないと思います。でも、神様をお祀りする大切なところですから、細部にいたるまできちんとしてみたいと私たちは考えています」(平岡さん)

2013年5月10日には、仮本殿に移っていた大国主大神が、修理を終えた本殿に戻る「本殿遷座祭」が執り行われる。平岡さんたちは今、その準備に追われている。

その60年後となると、2073年になる。次の大遷宮が行われるとき、おそらく「平成の大遷宮」に立ち会った経験のある人はごくわずかであろう。だが、きっとそのとき、多くの人が思うに違いない。

「60年前、ちゃん塗りの技法を復活させた人たちがいた。だから今、こうして私たちの時代にも、この伝統的な技法が伝承されているのだ」と。

[出雲大社] 島根県出雲市にある神社。正式な読みは「いずもおおやしろ」だが、一般には「いずもたいしゃ」と呼ばれている。祭神は、縁結びの神として知られる大国主大神(おおくにぬしのおおかみ)。現在の本殿は1744(延享元)年に建造されたもので、国宝に指定されている。2004年には本殿以外の撰社や楼門などが重要文化財に指定された。神楽殿に掛けられている注連縄は日本最大級で、長さが13メートル以上、重さが4トン以上もある。